

ENCOUNTER AT JOSHUA TREE - ANALYSIS AND PHOTOGRAPHS

By Steven M. Greer, M.D.

Director, CSETI and The Disclosure Project

May 2012

ジョシュアツリーにおける遭遇 - 分析および写真

スティーブン・M・グリア 医師

CSETI（地球外知性体研究センター）および公開プロジェクトの責任者

2012年5月

([SiriusDisclosureのウェブサイトより](#))

CSETI（地球外知性体研究センター）は、1996年から毎年ジョシュアツリー国立公園において、地球外文明とのコンタクトを行なうための集中的なトレーニングを実践してきました。2009年11月15日から21日にかけて、CSETIのスタッフおよび国内外の研究者40人のグループが、公園の奥深い場所で6夜を過ごし、コンタクト・プロトコルを学び、実践しました。

その2009年11月17日の深夜に、一連の驚くべき - そして歴史的な - 出来事が発生しました。このとき、一人の地球外知性体（ET）がコンタクト・チームの数フィート以内に出現し、チームの主要メンバーにより写真に撮られたのです。



背景を少し述べます：1996年以来、私たちはジョシュアツリーにおいて、次第にレベルの高まるコンタクトを経験してきました。（CSETI コンタクト経験のすべてを網羅した新著、『コンタクト：[転換へのカウントダウン \[Contact: Countdown to Transformation\]](#)』を読みたい。ジョシュアツリーにおける多くの経験がその中に含まれている）1996年、ジョシュアツリーにおいて同様の調査活動を行っていたとき、とても巨大な円盤型 ET 宇宙機が1機、私たちの前に現れました。それは宇宙空間から急速に降下し、地球に降り立ちました。この宇宙機は直径が200フィートを超え、底部が平で上部が先細りの、ハー

シーキスチョコレートによく似た形をしていました。その色はティールグリーン（深い青緑）でまばゆい光彩を放ち、完全には物質化していませんでしたが、とても鮮明ではっきりと見ることができました。それが地球に接近したとき、周囲の砂漠はほんの一瞬昼間のように照らされました。それからその宇宙機は、急速に地球に入ってきたのです。

私たちは宇宙機が地球に入ってきた正確な位置を記録し、そこで 1996 以来コンタクトの調査活動を行なってきました。そこは、ほぼ 80 万エーカーの広さを有するジョシユアツリー国立公園中心部のとても奥まった場所です。

ここは、あのオリオン信号（Orion Transmission）が受信された場所でもあります。CSETI のレーダー探知機により記録された、一連の電磁信号があります。それは 2007 年に始まり、続いて 2008 年と 2009 年の調査活動中にも強い信号が受信されました。（オリオン信号の解釈と記録に関しては [‘コンタクト： 転換へのカウントダウン’](#) および付録 DVD を参照されたい）

2009 年 11 月 17 日の夜に、一連の驚くべき出来事が発生しました。その場所に機器を設置すると間もなく、あのオリオン信号が再び始まり、磁気探知機、トリフィールドメーター（電磁波測定器）、レーダー／レーザー探知機など、電磁気装置類は完全なロックオン（自動追跡）状態になりました。休憩の間に、私たちの 1 グループはコンタクト・サイトを出て東に歩き、1996 年にあの ET 宇宙機が地球に入ってきた高地の砂漠平原に着きました。そこで私たちは、丸い宇宙機の形をした、奇妙なきらめく光体を目撃しました。それには柔らかくやや陰影のある、立って動いている複数の光体が見える部分がありました。それが ET たちであることを私たちは知ったのです。突然、地面からレーザーに似た白く輝く光が出現し、宇宙に向けて 45 度の角度で放射されました。このとき私たちは、これに続くコンタクトのための‘誘導’がすでに準備されていたことを知りました。

しばらくして、私たちはコンタクト・サークルに戻るために引き返しました。すると突然、北の方角にエメラルドグリーンの輝きを持つ光の炸裂があり、公園全体を照らしました。見たところ、それは地面から出現し、上方に向かったようでした。それは光の噴出のようであり、幾つかの見事な色へと変化しました：金色、ピンク、そしてマゼンタへ。この頃に、1 個の流星がユタ州で報告されていました。しかし、この光がその流星に関係していたのか - あるいは偶然だったのか - は不明です。

私たちがコンタクト・サークルに歩いて戻っているとき、私は 1 個の柔らかな白色の球体を目撃しました。それは直径が約 3 インチで、私たちの行く手の北側約 10 ないし 15 フィートにありました。それは線形時空に少しの間出現し、消えました。しかし、それは現れている間、グループに戻る私たちと一緒に移動していました。

私たちはグループに戻りましたが、グループの全員が北の方角にあった輝く光の炸裂について話していました。私たちが秩序を回復し、再びコンタクト・サークルを形成しよう

としたとき、何人かのメンバーが三人または四人の話し声を聞きました。それは、白いレーザー光と球体が目撃された、我々の戻り道の方角からでした。私には、一人の男性と二人または三人の女性の声ははっきりと聞こえました。その話し声は、私の知っている言語ではなく、私たちのチーム・メンバーの誰もいない場所から聞こえていました！



この時点で、私たちはコンタクト・サークルのすぐそばに ET たちがいたことを知りました。時刻は午後 11:30 頃で、私は皆に席に着くように言っていました。レイブン・ナブルシィが、東の方角で私たちの椅子の上方に浮かび、カメラを真っ直ぐに見ている ET の驚くべき写真を撮影したのは、このときでした。その ET の写真を撮った前後にも、彼女は何枚かの写真を撮りましたが、それらはすべて真っ暗でした。

私たちの調査活動に通じている人々は、ET 宇宙機および ET たちが次元移動により出現した複数の報告を知っています。私たちは、このような遭遇を数え切れないほど多く経験してきましたが、私が知る限り、ET が写真の中にこれほど完全に姿を現したのは初めてです。これは、UFO（未確認飛行物体）／ET（地球外知性体）の主題にかかわる歴史において、最も重要な出来事の一つです。

恒星間旅行の能力を持ついかなる文明も、当然ながら光速の壁を克服し、非物質化、再物質化、遠隔移動、空中浮揚、そして最も重要なことですが、意識、思考と技術を接続させる科学をマスターしていなければならないでしょう。そのような科学は、人間による区画化された機密プロジェクトの中では広範囲に研究されていますが、大部分の人々には不可解に思えます。しかし、それらの科学は地球外文明の基準では、むしろ当たり前のことなのです。

確かに、恒星間旅行文明は、超光速旅行を行なう完全な技術、およびそれに関係するあらゆる技術を持っている必要があります。彼らは、光速まで '加速' してそれを通過するわけではありません。その代わりに、彼らはとても進んだ物理学と電子技術を利用して共振場を発生させます。この共振場は、物体または人体を超光速の領域へと容易に位相シフトさせ、次元移動が可能な状態にします。

人類にとっての最も近い類推は、空を飛ぶ明晰夢でしょう。その中では、微妙なアストラル体が肉体を離脱し、'夢'の状態では空中を飛びます。しかし ET 技術の場合、このことが電子技術と工学技術を利用して行なわれます。それは一種の電子技術を使ったアストラル体投影であると考えてもよいでしょう - きわめて信頼性が高く、よく制御され、かつ特定のものです。

CSETI はほぼ 20 年間、調査活動中に経験した ET 宇宙機および ET のそのような奇妙な出現の仕方について報告してきました。しかし今回は、実際の ET が写真に撮られたのです。

その写真の出所に疑わしい点はありません。レイブン・ナブルシイは、信頼できる年来の CSETI メンバーです。加えて、彼女は 2009 年に、肉眼で見えなくても写真には撮らせてほしいと ET たちに頼んでいました。

オリオン信号が始まり、地面から白いレーザー光が現れ、3 インチの球体が浮遊しながら私たちと一緒に道を進み、ET たちの声が聞こえ - レイブンがこの写真を撮ったのは、このような出来事があった後のことでした。

[ここ](#)をクリックし、写真と計測結果の完全版を見られたい。

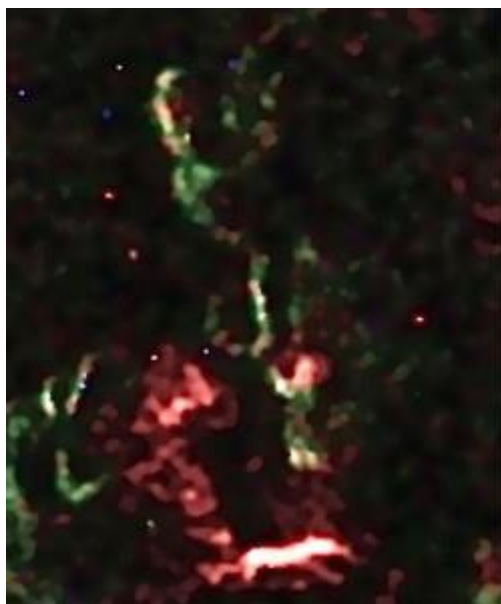
註：これらの写真は、高解像度のコンピューター画面またはテレビ画面で見るとより鮮明です。

ET は、茂みの左側にある小さな球体から発している、光円錐の中に浮かんでいるのが分かるでしょう。この球体は、まさしく私たちと一緒に道を進んだのが目撃されたあの球体であり、またこの写真が撮られる直前に ET の声が聞こえた場所に位置しています。

この ET は、男性のように見えます。視覚を増強する一種のゴーグルを着け、とても大きな頭部を持ち、額には隆起で区切られた窪み部分があります。髪の毛の生え際、耳、目、口、顎がはっきりと見えます。両腕、胴体、両脚が認められ、足にはブーツを履いています。彼は、私たちのコンタクト・サークを形成している椅子の上方 1 または 2 フィートに浮遊しており、サークルのちょうど東-南東側にいます。大きさは身長 3 ないし 5 フィートです。彼が前方に体を傾け、胴体と頭部をよじってカメラを真っ直ぐに見ていることに留意してください。右足は体の後に曲げられています。

撮影したデジタルカメラは、Fuji S7000 の 6 メガピクセルで、ISO 感度は 400 に設定されていました。露光は 3.5 秒で、フラッシュも三脚も使用していません。カメラは手に持っていました。肉眼では、球体も ET も見えませんでした。ET が、CSETI 宇宙大使コンタクト・イベントの期間中に敢えてこのような写真撮影を許したことは驚くべきことであ

り、歴史的なことです。確かに、今は一つのクライマックスを迎えつつあり、そこではますます接近し親密さを増すコンタクトが、地球に関心を持つ ET 文明と主要な CSETI 宇宙大使チームとの間で起きています。



なぜ肉眼では見えなかったのにデジタルカメラには捉えられたのか、と訊ねるかもしれませんが。デジタルカメラには、高品質の画像と高い光感度を得るために、CCD 画像センサーが使われています。CCD センサーは、時々肉眼では見えない紫外線や他のスペクトルを捉えるのです。

何年もの間、私たちはコンタクト・サイトの周りで、異常な光の形、光の放出、きらめく光体群を目撃してきました。そのとき ET または宇宙機が、突然に物質化し、また消失しているのかもしれませんが。

これは、次のように考えれば理解することができます。すなわち、ET 宇宙機は空中静止したまま、共振場により光速 (crossing point) を超える領域へと移行し、その物体 (または ET) が線形時空と相互作用を起こすときに生じる唯一の現象が、異常な電磁波、音、または微妙な光エネルギーの放出である可能性があります。([The Crossing Point](#) を読みたい)

CSETI イベントの期間中に、私たちは何百回となく電磁場や磁場の流束が発生する現象 (探知機で測定される) を観測してきましたし、そのときには微妙なきらめく光の形が、コンタクト・グループの周りを動いていました。しばしばチーム・メンバーたちは、このようなイベントの間に、物理的かつ触覚で容易に分かる接触を経験してきました。しかし、そこに何がいるのかと目を向けると、観測されるのはただの希薄な空気です。もしかすると、それに微妙な光の動きか、場の流束が伴っているのかもしれませんが。

この写真を見てお分かりのように、手に持ったカメラを 3.5 秒間露光したにしては、そこにある球体に照らされた椅子や茂みが、きわめて輪郭明瞭です。これは、この球体と ET がごく短時間、次元移動により '滲み出た (bleed through)' ことを示唆しています - その持続時間はおそらく 1 秒の何分の 1 かで、肉眼では目撃できなかったのでしょうか。人間の目の光学系も、視神経および脳の神経系も、ごく一瞬のフラッシュ光を別にして、このような出来事を検出することはできないでしょう。

実際に、そのようなフラッシュ光、急激な磁場および電磁場の流束が、今回のイベント中に観測され、記録されていました。

恒星間旅行文明がどのようにして星々の間を移動するのか、また私たちの周囲に出現するのか、それを理解するためには、従来の物理学と宇宙観を完全に再考する必要があります。超光速で行なわれる旅行、交信、および相互作用を含む、次元移動の諸科学は、CSETI が中心的に取り組んでいる分野であり、また CE-5 (第 5 種接近遭遇) コンタクト・プロトコルの核心です。(CE-5 活動の説明を読みたい)

これは類推ですが、旧式ラジオを考えてください。あなたはダイヤルを回してラジオ周波数を上下させ、様々な放送局を探します。ある周波数に合わせると、その放送局がはっきりと聞こえます。次に別の周波数に上げると、また別の放送局がはっきりと聞こえます。しかし、異なる放送局間の周波数に合わせると、幾つかの放送局が同時に聞こえますが、不明瞭です。

同じように、ET の旅行、交信、相互作用に関係する進歩した物理学および電磁気科学は、完全に光速の壁を越えてまったく目に見えないか、宇宙機もしくは ET が完全に物質化するか、または、今回の場合のように、いうなれば放送局の間にあり、半ば物質化するのかもしれない。

従来の型にはまった科学者たちは、そのような考えをあざ笑うかもしれませんが、これらの概念は、私が会ってきた機密情報機関や航空宇宙業界にいる人々により、真剣に考えられていることなのです。

さらに言うなら、私たちには科学的な謙虚さというものがが必要です： 遠く離れた銀河系または恒星系から地球に到達する能力を持ついかなる文明も、当然ながら超光速、次元移動の科学をマスターしています。そうだとすれば、彼らが人類の 21 世紀初頭の科学に甘んじている理由などあるのでしょうか？ おそらく、UFO および ET の主題にある困難さの一部は、何が可能なのかについての人類の意識を拡張することです - 重層的次元の中で起きるコンタクト、そこは思考と機械装置が一体化し、可能性の限界が天空も宇宙空間をも超え、人類の意識の最遠部に到達する世界です。

(訳： 廣瀬 保雄)